

論文審査要旨及び担当者

報告番号 甲 乙 第 号 氏名 佐藤 光重

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授 巽 孝之
文学研究科委員、Ph.D.

副査 慶應義塾大学文学部教授 松田隆美
D.Phil.

副査 ブラウン大学アメリカ研究学部教授
バートン・L・セント・アーマンド (Barton L. St.Armand) Ph.D.

論文題目“Puritan Baroque:The Transformation of Renaissance Intellectual
Traditions in Anne Bradstreet, Edward Taylor, and Cotton Mather ”

佐藤光重君による博士号請求論文 “Puritan Baroque: The Transformation of Renaissance Intellectual Traditions in Anne Bradstreet, Edward Taylor, and Cotton Mather”は、ピューリタン植民地時代の初期アメリカ文学が必ずしも従来解釈されてきたようには一元的でなく、きわめて異種混淆性に富んだものであり、特に、ルネサンス以後のカトリシズムの学芸をその内部に巧妙に組み込んだテキスト群であることを徹底的に究明した、稀少にして学問的貢献度の高い論考である。

各章は以下のように構成されている。

Introduction

1. The Puritan Hall of Fame: Anne Bradstreet and the Renaissance Art of Memory
2. Astrology and Anne Bradstreet's Poetry:Experiments in Puritan Almanacs
3. The Puritan Baroque Reconsidered:Edward Taylor's Instrumental Poetry
4. The Accomplished Singer:The Plain Style in Puritan Psalms
5. A Bay Psalm Pedagogy: Cotton Mather's Evangelism and New England Propaganda

Conclusion

Bibliography

Chronology

論文概要

今日のアメリカ文学史は、アメリカのピューリタンが膨大な量の日記、日誌、歴史書、地誌、説教などを残してきたことにひとつの根拠を求めている。じっさい 1930年代より 40年代にかけ、ニュー・クリティシズムとともにアメリカ文学研究が確立され始める頃、Perry Miller、Samuel Eliot Morison、Kenneth Murdockらの歴史研究が大きな礎となり、1960年代にはピューリタンの著作は初期アメリカ文学の核心として成立する。しかしその成果は、主に神学および宗教・政治思想の解明において顕著なのであり、初期アメリカ文学研究の全貌はいまなお詳らかではない。とりわけ、ピューリタンがアメリカの支配的勢力であった時代が、イギリス本国ではダンやミルトン、ドライデンらのバロック文学が頂点を迎え、ヨーロッパではルーベンス、レンブラントの絵画、バッハやモンテ・ベルディの音楽に代表されるバロック芸術全盛の時代であったことは、意外にもほとんど注目されてこなかった。

1941年にAustin Warrenがコロニアル・バロックなる視点を提唱して以後は、ほんのわずかな例外的研究を除き、ピューリタン文学におけるバロック的想像力の可能性を本格的に検討する向きは見られない。ところがマサチューセッツ植民地は、じつは東インドから西インドまでにおよぶ国際的な貿易の中継都市であったから、砂糖、タバコなどの物産やアフリカからの奴隷が行き交うはざまに、多様な文化的遺産が移植されて、新大陸ならではの变容を見せている。本論文は、歴史学および文学研究における新歴史主義批評（ニュー・ヒストリシズム）以降の Sacvan Bercovitch、Jenny Franchot、Philip Gura、William Spengeman、Michael Colacurcioらの批評理論の成果を踏まえ、アメリカのピューリタンのテクストを、多様な文化が交錯する国際中継地マサチューセッツ湾植民地に生まれた総合芸術として新しく捉え直す。

そのさい、本論は、バロック時代の17世紀初頭から18世紀前半にかけてアメリカで旺盛に執筆活動を展開した3人のピューリタンに焦点を絞る。すなわちアメリカ最初の女性詩人アン・ブラッドストリート、正統派ピューリタン神学を堅持しながら密かに神秘哲学に傾倒していたエドワード・テイラー、そして、当時は小都市であったボストンで一生を終えながら、世界中の人物と書簡を交わし、ハーバード大学をしのぐ蔵書を有していたコットン・マザー牧師の3名である。彼らを「バロック」の文学者と呼ぶのは、いずれも異種混淆性や即興性、実験精神、さらにはその語源を成す「歪み」や「野蛮」を含む特徴をもつ芸術に携わっているからである。

本論でとりわけ強調したのは、ピューリタン文学がニュー・イングランドの地理的、人種的、そして文化的多様性を反映するポリフォニーの文学であるという点だ。ピューリタンの文学は、植民地建設における商業活動にともない、さまざまな人種と文化が流入し融合する環境でかたちづくられた。ピューリタンの文化がいくつもの異なった様相を呈した第一の要因としては、民衆の想像力が多岐にわたって浸透していたことが挙げられる。出版物の流通を調べると、当時のニュー・イングランドでは説教をはるかに上回る勢いで暦が出まわっており、有力な牧師もしばしば占星術に手を染め、

教会での説教よりも処刑台での囚人との対話を出版した者がより多くの世間の関心と尊敬とを集めた。このことから窺われるように、民衆文化の影響力がはなはだ強く、神学論争でさえ正統のピューリタニズムのみに基いていたわけではなかった事情を見逃すことはできない。さらには、ピューリタニズムそのものが、南米を侵略し、絶えず東海岸の版図も脅していたカトリックの伝統に圧倒されていたことも、アメリカ・ピューリタンのテクストを単にピューリタニズムだけからでは読み解くことができない複雑なものにした大きな要因である。かくしてルネサンス以降のカトリシズムの学芸はピューリタニズムに複雑なかたちで継承され、加えて民衆文化の旺盛な想像力により、占星術、記憶術、オカルト・疑似科学がまことしやかにピューリタニズムの衣をまとうこととなる。戦争と隷属の歴史的惨劇にみまわれたアメリカン・インディアンやアフリカ人奴隷も、疫病や魔女狩りに翻弄されるピューリタンの不安な想像力に隠然たる闇の力をもたらした。

ピューリタンの活動が活発であった時期はまさにバロック期にあたり、ニュー・イングランドにおいてピューリタン文学が生み出された時代に旧大陸やイギリスの芸術家は装飾性に満ちた重厚な美を競っている。この時期に新大陸での芸術活動が皆無であるはずはないものの、劇場を封鎖しカトリック寺院の偶像を破壊したことから類推して、ピューリタンと芸術とはあたかも相反するものであるかのごとく扱われてしまうことが多い。そこで、ピューリタンの暦、歌、民間療法、植民活動を宣伝するパンフレットなどから、これまで看過されがちだったピューリタンの芸術性、とりわけ、バロック的な異種混濁性、即興性、そして実験精神を、本論は明らかにする。それにより、とりもなおさず単一なピューリタン像を見なおし、個々独立した複数の文化が共存・融合するピューリタン文化の多重構造を浮き彫りにする。

第1章 “The Puritan Hall of Fame: Anne Bradstreet and the Renaissance Art of Memory” では、アン・ブラッドストリート の長編詩に組み込まれた記憶術の枠組みを分析して、彼女の詩が絵画、彫刻、建築の側面もあわせもった総合芸術であることを示す。しばしば、ピューリタンは絵画や彫刻といった視覚的イメージを嫌うとされる。げんにピューリタンの牧師には、移住に先立ち Peter Ramus が打ち立てた論理学を修めていたものが多かった。のちにラムス主義と呼ばれるこの論理学は、図像を駆使するそれまでの記憶術に替わるあらたな記憶術として、ピューリタンたちに大いにもてはやされた。しかし、ラムス主義は植民地において、絵画的なイメージに頼る伝統的な記憶術を駆逐したわけではなく、むしろそれと併用されることが多かった。Cotton Mather 牧師が 400 冊を超える出版物を著した背景には、明らかに記憶術の枠組みで後世にピューリタンの歴史を語り伝えようとする壮大な意図がひそむ。このとき、記録は事実上ピューリタンの脳裏に刻み込まれた記念碑や彫像のイメージで捉えられており、カトリックが地上に建立した芸術作品を意識して、ピューリタンは仮想空間の建立物こそ、何ものにも勝る永遠の作品と考えたのである。したがって、神の御業を記録し、なおかつ自らも神の栄光を人々に想起させるよすがとなる存在を、マザー牧師は “Remembrancer” と称した。

かくしてマザーは日記で自らをニュー・イングランドの Remembrancer に任じるのだが、ピューリタンの歴史を遡れば、彼に先立ち、入植第一世代、アメリカ最初の女性詩人 Anne Bradstreet こそは、はやくも Remembrancer たらんと意図した最初の人物であろう。彼女はルネサンスの記憶術の伝統に立脚した長編叙事詩や抒情詩を創作し、その実験精神にあふれる作風によって、後世の人々が記憶することで代々継承されてゆく仮想のピューリタン宮殿をイメージとして建設したのである。

第 2 章 “Astrology and Anne Bradstreet’s Poetry: Experiments in Puritan Almanacs” では、ニュー・イングランドに流入したヘルメス主義と民間の占星術とを組み合わせ、ブラッドストリートが、民衆文化の想像力にあふれる暦形式の詩を編み出していたことを明らかにする。同作品が象徴するのは、ニュー・イングランドにおける高度な教養と世俗の知恵との融合を試みるブラッドストリートの旺盛な実験精神である。後にブラッドストリートの家系から、マザー牧師も含め三代に渡るピューリタンの暦作者が続いたことについては、傍証として家系図を付す。

第 3 章 “The Puritan Baroque Reconsidered: Edward Taylor’s Instrumental Poetry” では、ピューリタン芸術家 Edward Taylor 牧師の瞑想詩を植民地におけるバロック音楽として読み直す。たとえば、聖イグナチウス・ロヨラの『靈操』*Spiritual Exercises* は、反宗教改革の時代にカトリックが生み出した大いなる遺産であるが、カトリックの靈操は実のところピューリタンの瞑想録に脈々と受け継がれている。アン・ブラッドストリートの代表作 *Contemplations* や *Meditation Devine and Moral* は、その典型だ。しかしとりわけ注目に値するのが、テイラーである。1940 年代になって初めてその存在が広く知られるようになったテイラー牧師の膨大な瞑想詩からは、まさしく彼がカトリック的な精神修養に努めていたことが伝わってくる。本論では彼の瞑想詩を植民地における一種のバロック音楽として捉え返す。彼はある意味で天体の調和、神秘の調合を探求する実験家であり、正餐と聖体拝領に関する解釈においてはプロテスタントともカトリックともとれない多彩な思想家でありかつ芸術家でもあった。しかも、ピューリタンにおける信仰告白 / 回心体験記 (conversion narrative) の伝統は即興性を重視する。なぜならカトリックの規格化された典礼や儀式を否定して、信者それぞれが会衆の前で独自の証をたてるからである。この独創性が祈りの文句や賛美歌、詩の創作に活かされることを考えると、安息日の説教に用意されたテイラーの詩はカトリックの学芸とピューリタニズムの精神とを融合した、それ自体が一種の即興演奏だったと考えられる。

植民地時代におけるバロック芸術を考えることで、これまでピューリタン文学特有の文体とされてきた Plain Style (平明体) の再解釈も可能となる。第 4 章 “The Accomplished Singer: The Plain Style in Puritan Psalms” では、これまでピューリタンの文体の代名詞と考えられてきた簡素な Plain Style が、決して彼らの普遍的なスタイルではないことを例証する。そもそも想像力の営み自体をピューリタンが否定的に捉えていた点は、しばしば指摘されてきた。かくして、想像は真実をゆがめ、誇張し、虚飾するものだという観念が、事実のみを平易に記述せんとするこの文体の中にこそ、

最も如実に表れているという評価が生まれる。しかしながら、マザー牧師の著作を見てゆくと、ピューリタンはさまざまな文体を時と場合に応じて使い分けており、説教原稿ではむしろ装飾と技巧を凝らした文体を用いている場合が圧倒的に多いことがわかるだろう。Plain Style は、むしろ児童や若者に向けて著した教理問答や教育図書において見られるのだ。とりわけヘブライ語の詩篇を独自に翻訳するさいに、原典の意味を損なわず、なおかつ覚えやすい文章にすべく、ブランク・ヴァースの形式とともに、融通が利く文体として Plain Style を採用したと本論では結論する。1721年にマザー牧師は甥の Thomas Walter とともにニュー・イングランドにおける音楽教育の大改革に着手した。このとき、マザーは文学にとどまらず音楽にも Plain Style を応用した。1721年に登場したマザーの *Accomplished Singer* とウォルターの *The Grounds and Rules of Musick* は、ピューリタンの音楽観が、彼らの文体論と密接なつながりを持っていたことを裏付ける。

ブラッドストリートやテイラーの詩には音楽の比喩がじつにおびただしく使われている。マザーの日記や自伝をもとにピューリタンの日課を探ると、じつは彼らが、禁欲的でありながらも歌にあふれる生活を送っていたことが判明しよう。するとピューリタンの詩にあらわれる音楽的表現は必ずしも比喩ではなく、彼らの演奏形態をほのめかす資料として再解釈する必要が出てくる。ここにこそ、ブラッドストリートやテイラーの詩を歌として見る新たな展望の可能性が横たわる。

歌が教育の道具として有用なのは、昔も今も変わらない。ピューリタンは入植当初より正統な記憶術としてフランスのラムス主義を採用し、他方でブラッドストリートの作品に見られるルネサンス記憶術も捨てなかった。いずれにせよ、彼らが記憶を何よりも重視し教育に応用したことは疑いえない。だとしたら、歌にも教育・洗脳の道具である記憶術としての側面があったと仮定できよう。本論の第5章にして最終章にあたる “A Bay Psalm Pedagogy: Cotton Mather's Evangelism and New England Propaganda” は、まさにそのような視点から、賛美歌斉唱を奨励したピューリタンの宗教活動に潜む政治戦略を読み取ろうと試みる。マザーの植民地活動宣伝 *India Christiana* は音楽教育改革の年 1721 年に出版され、同作品は音楽の比喩、なかでも Old One-hundred として今日にも伝わる代表的な賛美歌の詩句を繰り返すことで、ひとつの巨大な賛美歌として編まれていた。しかし、美しく賛美歌を斉唱するインディアンの姿はマザーの文章にみなぎる過剰なまでの比喩の効果に多くを負っているであり、植民地活動を宣伝するうえで都合の悪い事実は、美しい比喩の氾濫と賛美歌斉唱のイメージとによって巧みに隠蔽されているのである。マザー牧師にとり、賛美歌は家庭や社会の秩序維持ばかりでなく、歴史を捏造し、カトリック勢力やイギリス議会に向けてインディアン改宗政策の失敗を隠蔽する目的にも役立てられた。このように複合的な構造はとりもなおさず、本稿で扱うブラッドストリート、テイラー、マザーすべてのテキストに通底するピューリタン・バロックの本質をさらに補強し、これまでの研究史では無視ないし排除されてきたピューリタンと芸術的想像力の関わりという問題に対して新たな展望をもたらす。

審査要旨

佐藤光重君の博士号請求論文“Puritan Baroque: the Transformation of Renaissance Intellectual Traditions in Anne Bradstreet, Edward Taylor, and Cotton Mather”は、初期アメリカのピューリタン文学がバロック的な雑種性と即興性を特色としていることを指摘し、それがまさに当時のピューリタン社会の不安定さの表現に他ならないことを、Anne Bradstreet, Edward Taylor, Cotton Mather のテキストの精読を通じて明らかにした、学術性と独創性に富む論攷である。たしかに、これまでのアメリカ文学史におけるピューリタニズムの評価は、マックス・ウェーバーがプロテスタンティズムの倫理を資本主義の精神の形成に寄与するものと見た社会学的知見の影響を多大に受けており、そのため一元的な価値体系として定着してきたきらいがあった。

けれども、今日、ニュー・ヒストリシズム以降、ポスト・コロニアリズム以降の批評方法論は、そうした一元的なピューリタニズム観そのものが、じつは大いなる神話にすぎなかったのではないか、じつはピューリタニズムとはきわめて多元的な価値体系ではなかったのかと根本から問い直す。佐藤君が、そうした最先端の文学研究および文化研究の収穫を幅広く吸収していることは明白である。だが、ここで何よりも注目すべきは、彼が、そのような最新の方法論を熟知しながらも、それを使いこなしていく過程で、ピューリタン文学およびピューリタン文化双方の研究にとって前人未到の領域を開拓するに至ったことだ。同時代の南米ラテン・アメリカ文化を通例コロニアル・バロックと称するけれども、にもかかわらず、ラテン・アメリカ文化におけるバロック研究が極めて盛んであるのに対し、ニュー・イングランドにバロックを見出した研究は実際のところ少ない。だからこそ、それまでのキリスト教系西欧社会において支配的であったカトリック・バロックと絶妙に拮抗するかたちで、それを内部から批判し変質させるようなピューリタン・バロックが形成されていた経緯をじつにあざやかに描き出してみせたこの論文は、国内外でも類例のない学際的業績として、高く評価することができる。

本論がとりわけ印象深いのは、このように挑戦的な前提を着実にふまえつつ、まさにその証明のために、ルネサンス以後のカトリシズム的な諸学諸芸術がいかにピューリタン文学へ深い影を落としてきたかを細部に渡って検討し、テキスト内部に隠された意匠をみごとにあぶり出していく点だ。その結果、論者は最終的に、芸術に潜むレトリックから従来のピューリタン政治・神学論争を再検討し、さらにはカトリックのアイコンをしのぐ壮大なる世界観をピューリタンが持っていたことを解き明かすことにより、国際的文脈においてニュー・イングランドを位置づけ、視聴覚双方の観点からピューリタン文化を再構築するという、旧来まったく顧みられなかった領域を切り拓く。それはそのまま、初期アメリカ文学研究の根本を問い直し、アメリカ文学史そのものの再構築をも迫る。雄大な主題と緻密な論理、かてて加えて破綻のない流麗なる英文によって構築された論文であり、去る 2000 年 11 月 27 日(月)に執筆者本人との口頭試問を終了した審査委員会は、これを文学博士号の授与に相応しい論文であ

ると判断する。

佐藤君は、初期アメリカのピューリタン文学は、“ a baroque style which arose as its techniques and tendencies evolved from Catholic and Renaissance origins ” (4)によって特徴づけられるという認識に基づき、ルネサンスの多様性とカトリック宗教改革の知的文脈のもとで Anne Bradstreet, Edward Taylor, Cotton Mather の3人のテクストを読み直している。その試みは、論文の中核を成す個別研究において、緻密な一次資料の分析に裏打ちされた説得力のある結論に結実している。

Anne Bradstreet を論じた第1章と第2章では、アメリカ初の女性詩人ともいわれる彼女の詩作品の基底を成すルネサンス記憶術と占星術の存在を明らかにし、Bradstreet を “ Puritan remembrancer ” として位置づけることに成功している。このうち記憶術の伝統を論じた第1章の初稿は、厳密なる審査を経て学術雑誌〈英文学研究〉英文号(2000)に掲載されており、それは本邦英文学界全体において第一級の品質を保証されたことを意味する。また第3章で、Edward Taylor の詩における numerological な分析をさらに発展させ、Taylor の *Meditations* には、“ harmony of spheres to symbolize eternity ” (70)と “ an academic pursuit for eternal life ” (76)という二面性があることを、バロック音楽理論との関わりで明らかにしている点も興味深い。さらに第5章における Cotton Mather に関する論考は、Mather が “ a harmonious Puritan society, including images of Puritans singing psalms in harmony ” (116)ともまとめられるヴィジョンを演出するためにいかに聖歌詠唱法を利用したかを詳細に論じ、彼の科学的興味をも浮き彫りにした、極めて説得力のある小論である。

以上のように、論文全体の独創的な枠組みと各論の検証および推論の緻密さにおいて、これは基本的に完成度の高い論文であるが、にもかかわらず主に今後の課題として、若干改善の可能性がある点を指摘したい。

まずひとつには、たしかにカトリック・バロックとピューリタン・バロックという対立図式そのものはきわめて魅力的であるものの、ふりかえてみるに、そもそもピューリタン植民地時代のアメリカにおいては、むしろニュー・イングランドとカリブ海領域が海路によって直結し積極的な交易が行なわれていたのだから、そうした地政学的配置をもっとつきつめて考え直すことが、ひとつの異文化伝播経路に関していっそう強力な傍証を施す手立てになるのではないか。もしその点を補うことができれば、当時における南米と北米の相互交渉という、よりダイナミックな視点から、ピューリタン・バロックの構図を浮かび上がらせることができるだろう。

もうひとつには、これは審査員全員が感じたことであるが、ルネサンス以後のカトリシズム的諸学諸芸術にこだわりながらも、執筆者の傍証の中心があくまで文字を媒介にした文学テクストであり、例外的に第4章 “The Accomplished Singer: The Plain Style in Puritan Psalms” に賛美歌の楽譜が掲載されているにすぎないという問題がある。論理の運びがきわめて着実であるため危なげがないので見過ごしてしまうのだが、少なくとも17世紀植民地時代の文化的深層に息をひそめていた学芸の構造を明らかにするためには、この論文の場合、たんに歴史的文献からの引用にとどまらず、もう

少し視覚的に訴える図版資料をもふんだんに用いるべきではなかったか、そうしなければ十分な説得力を発揮することが困難なのではないか、というのが偽らざる印象であった。

具体的には、たとえば Anne Bradstreet における Almanac の影響を考えるにあたって、同時代の emblem book との関係性を、単に具体的な類似性のレベルを超えて検討する余地があろう。特に、イエズス会がカトリック宗教改革の具体的手段として利用した 17 世紀の Jesuit emblem books におけるイメージの利用法は、その手法を利用した Francis Quarles の *Emblemes* などを通じて、Anne Bradstreet の詩における視覚的要素を検討する際に活用できる。具体的な Almanac のなかでは、16 世紀において複数の言語で広く知られていた百科辞典的なベストセラー、“Kalendrier des Bergiers”が、示唆的な類似を提供してくれるであろう。また、聖イグナチウス・ロヨラが『靈操』のなかで明示した段階的黙想は、当時のイエズス会の emblem book における思考プロセスの基本であるが、ピューリタンの瞑想詩を考える上でも無視できないと思われる。欲を言うならば、博士論文としては比較的短く仕上がっているため、上記の点についてさらなる考察と修正を加えれば、佐藤君が行き着いた結論をさらに堅牢なものにできるのではあるまいか。

また佐藤君は“Puritan Baroque”を論文全体の構成を説明するキーワードとして用いているが、論文の冒頭においてその場合のバロックの working definition がより明確に示されることが望ましい。

さらに細部においては、目次および全体の構成においてきちんと章割を行ない章番号を付すこと、Bibliography においては、primary source と secondary source を分けて列挙し読者への配慮を示すことが望ましい。

とはいえ全体的には、佐藤論文は、いわゆる民衆文化や秘儀的な知的伝統にバランスよく目配りをしながら初期アメリカ文学の構造を積極的に読み直しているのみならず、カトリック宗教改革によってヨーロッパからアメリカ、南米、アジアへとその範囲を拡大していった 17 世紀文学全体のなかにアメリカのピューリタン文学を位置づけるという極めて重要な視座を内包している。その意味で、中世から続く知的伝統の 16-17 世紀における多様化と変容、そしてカトリック宗教改革による中世以来のカトリック的伝統の再システム化というヨーロッパ的文脈のなかで、具体的な研究をさらに深めていくことが大いに期待される。審査委員一同、博士号を取得する資格充分と判定するゆえんである。